

## ＜家＞の変容とその二重性 ：林芙美子「幸福の彼方」読解の試み

桂嘉雨

林芙美子は日中戦争における従軍ペン部隊の一員であり、報国文学の担い手と言われている。日中戦争期の林文学に関する先行研究は主に「従軍記」（書翰体「戦線」1938年；日記体「北岸部隊」1939年；小説「波濤」1939年）をめぐる論であり、他の作品はほぼ論じられていない。本稿が取り上げる短篇小説「幸福の彼方」は1940年12月に発表されたが、2012年に映画化され、「女性の生き方、そして夫婦や家族のあり方を問う感動作」として評価されている。

ところが、「幸福の彼方」では、「強い女・弱い男」という昭和前期において異色なく家＞の構造が浮き彫りになっている。物理的な面において、主人公である絹子は大柄で丈夫な人である一方、夫の信一は戦場で片眼を失った体が弱い人である。さらに、精神的な面において、妻である絹子が夫を引っ張る描写も見受けられる。それ以外に小説に登場する二人の女性も、それぞれポジティブ（良い母親像）／ネガティブ（悪い母親像）な意味で「強い女」に属する。このような家＞の構造は、家制度において権力の中心である家主と、その附属品である妻という一般的な構造とかなり異なっている。では、この家＞の変容は当時、どのような意味を持つものだったのだろうか。

テキスト分析を主要な方法としながら、フェミニズム文学批評の視座およびポストコロニアル理論を併用して考察した結果、以下の結論に至った。「幸福の彼方」という小説から異色なく家＞の形が現れている。それは明治時代で法的に定められてから力強く続いてきた家制度から生まれた「良妻賢母」と大いに異なる「女強男弱」という構造である。そこには家制度への反発とより平等なジェンダー意識が含まれ、当時の女性に生きがいを与えるという積極的な意味を持つ一方で、侵略行為を美化し、女性を戦争支持に導くというナショナリズム的な危険性も内包していると考えられる。

## ＜家＞の変容とその二重性：林芙美子『幸福の彼方』読解の試み

桂嘉雨 ハーバード大学東アジア研究・修士一年生

### はじめに

林芙美子は日中戦争における従軍ペン部隊の一員であり、報国文学の担い手と言われている。<sup>1</sup>日中戦争期の林文学に関する先行研究は主に「従軍記」をめぐる論であり、<sup>2</sup>林の政治的イデオロギーとジェンダーアイデンティティによる葛藤や選択について論じられてきた。その一方で、戦時小説（特に虚構性が高い小説）というジャンルについての研究はまだ十分とは言えない状況にある。本稿が取り上げるのは1940年12月に発表された短編小説「幸福の彼方」（改造社、短編集『魚介』に収録）である。同作品は2012年に映画化され、「女性の生き方、そして夫婦や家族のあり方を問う感動作」<sup>3</sup>として評価されている。

「幸福の彼方」には、元奉公人だった女主人公・絹子が戦場から戻り、片目を失った男・信一との見合い結婚が描かれている。結婚した後、信一から子供がいると打ち明けられた絹子は一時的にそれを受け止めることができなかったが、信一の深い愛情に感動し、また電車で見かけた「奥さん」という「母親」のイメージに揺さぶられたため、最終的にその子供の存在を受け入れ、自分が母になることを幸福と見なすようになる。

ところが、この小説から浮上した異色な＜家＞の構造が興味深い。野崎は近代日本における一般的な家族像について、「明治時代には『家』の制度というわが国特有の家族制度があり、男系長子に譲られる戸主は家を統率するものとして大きな権利を持っていた。儒教思想の影響も大きく、極端な男尊女卑の考えも一般的であった。女性の美德は従順・忍耐などとされていた」と述べている。<sup>4</sup>しかし、「幸福の彼方」には「強い女・弱い男」という異色な＜家＞の構造が浮き彫りになっている。物理的な面において、主人公の絹子は大柄で丈夫な人である一方、夫の信一は戦場で片眼を失った体が弱い人である。さらに、精神的な面においても、妻の絹子が夫を引っ張る描写が見受けられる。それ以外に小説に登場するもう二人の女性、つまり電車で夫と三人の子供の面倒をきちんと見ている「奥さん」と、夫と産んだばかりの子供を見捨てた信一の元妻はそれぞれ「良い母」と「悪い母」の意味で「女の強さ」を示している。このような＜家＞の構造は、家制度において権力の中心である家主と、その附属品となる妻という一般的な構造とかなり異なっている。では、この＜家＞の変容は当時、どのような意味を持つものだったのだろうか。

### 一 ＜女強男弱＞という構造

本論に入る前に、小説内部の時間について整理しよう。信一は「二十二の時に名古屋へ出て、陶器会社の事務員に勤めてみたのだ。…一年ばかりもすると少しばかりの貯金

<sup>1</sup> 徐青（2009）「メディアとしての女性—吉屋信子『戦禍の北支上海に行く』におけるシャンハイ・イメージ」『愛知大学国際問題研究所紀要』第133号, pp.165

<sup>2</sup> 成田龍一（2001）『＜歴史＞はいかに語られるか：1930年代「国民の物語」批判』日本放送出版協会；菅聡子（2010）「林芙美子『戦線』『北岸部隊』を読む—戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー」『表現研究』第92号, pp.25-32；五味渕典嗣（2014）「文学・メディア・思想戦：＜従軍ペン部隊＞の歴史的意義」『大妻国文』第45巻, pp.93-116；李相赫（2020）「林芙美子の『戦線』における感覚と不安」『超域的日本文化研究』第11巻, pp.124-138；野田敦子（2020）「戦時下の女性表現：林芙美子「北京紀行」「中国之旅」を一例に」『日本研究』第60巻, pp.119-140 ほか

<sup>3</sup> 立誠シネマ、『高瀬舟』×『幸福の彼方』BUNGO in 京都 豪華二本立て！  
<http://risseicinema.com/movies/1408>

<sup>4</sup> 野崎衣枝（1990）「明治文学に現れた死をみとる家族：正岡子規の場合を中心に」『順天堂医療短期大学紀要』第1号, pp.64-73

も出来たので、郷里から妻を貰った。小柄なおしやべりな女だったが、子供が生まれると間もなく、この妻は子供を置いて信一の友達と満洲へ逃げて行ってしまうのだ」という記述からすれば、信一は早ければ24歳の時に子供ができた可能性があり、そして偽満洲国の成立時間（1932年2月）を合わせて見ると、小説の舞台（信一が28歳である）は1936年以降に設定していると推測できる。

さて、このテキストにはどのような男女像が描かれているのであろうか。まず、男女主人公の初対面を見てみよう。

寿司の上をにぶい羽音をたてて大きい蠅が一匹飛んでゐる。絹子はそつとその蠅を追ひながら、素直に寿司皿のそばへにじり寄って行つて小皿へ寿司をつけると、その皿をそつと信一の膝の上へのせた。信一は皿を両手に取つて赧くなつてゐる。絹子はまた割箸を割つてそれを黙つたまま信一の手へ握らせたのだけれども、信一はあわててその箸を押しいただいてゐた。（注：下線と太字は筆者によるもの。下同。）<sup>5</sup>

この場面における絹子と信一の行動は対照的に見える。絹子の行動から、この場面の主導権、そして精神的な余裕を持つことが見受けられる反面、信一のぎこちなさとその年齢と相応しからぬ初々しさが明らかに伝わってくる。

さらに、信一の反応を見た絹子に対する描写も興味深いものである。

ふつと触れあつた指の感触に、絹子は胸に焼けるやうな熱さを感じてゐる。

信一を好きだと思つた。

何がどうだと云ふやうな、きちんとした説明のしやうのない、みなぎるやうな強い愛情のこころが湧いて来た。

ここで二つ注意すべきところがある。第一に、受け身という印象の強い近代的女性像とは裏腹に、絹子は信一への愛情を自ら明確にしている。第二に、絹子は信一の初々しさに心を打たれる。言い換えれば、絹子は自分より「弱い」様子を示してきた信一を可憐で愛おしく思っている。

さらに、挿入法で加えられた二人の生い立ちに関する描写において、絹子は「美しくはなかつたけれども、愛嬌のいい娘で、大柄でのんびりしてゐるのが人に好意を持たれ」、「お嬢さまづきだつた」ゆえに「何の苦労もなしに二十一まで暮してきた」と同時に、「二度ほど縁談があつたにもかかわらず、「厭だつたのですぐその縁談は断つて貰つた」という芯が強い女性である。一方、信一は「長らくの病院生活で、色は白かつた」顔をしており、貧しい暮らしをしてきた身である。

つまり、物理的な面において、絹子はこれまで比較的裕福な生活をしており、大柄で健康的な人である一方、信一は貧しい暮らしと前線体験を経て、体の弱い障害者である。精神的な面において、絹子は自分の意志で結婚相手を決め、素直に男へ好意を示し、対話の主導権を握っている。それと対照的に、信一は絹子の行動に対してぎこちなく初々しい反応を示し、受動的な立場に立っている。以上のように、＜女強男弱＞の構造を浮き彫りにすることができるのであろう。

しかし、その構造は当時において極めて異色であることが家制度を合わせて考えてみれば明らかになる。前節で触れたように、明治時代で定められた家制度は家長制（または戸主制、父が家の最高権力者＝戸主＝家督である）、家督継承制（家督は男系長子にしか継がれない）、そして男尊女卑という主な特徴がある。<sup>6</sup>そのような家制度は1947年に

<sup>5</sup> 「林芙美子全集 第十五巻」文泉堂、1977年4月発行。下同。

<sup>6</sup> 李卓（2013）「從家到家庭：跨越三個時代的艱難歷程－日本家庭關係演變對照」『人民論壇』第23号、

おける戦後の民主化改革の一環である民法改正により廃止されるまで、小説内部の時間＝昭和前半期においてはまだ力強く作用し続けていたと考えられる。にもかかわらず、この小説で＜女強男弱＞という異色なく家＞の構造が明らかになっていることは、伝統的な「家制度」への反発だと言える。

## 二 ＜女々しい男＞というイメージ

前節は「幸福の彼方」に現れた＜女強男弱＞という異色なく家＞の構造について分析してみた。ここで一旦、信一という登場人物に注目したい。絹子より弱い立場に立つこと以外に、信一には吟味に値するもう一つの点がある。それは、「女々しいほど」子供と妻の絹子を愛することである。

小説において、「子供が生れると間もなく」元妻が「子供を置いて信一の友達と満洲へ逃げて行ってしまった」ため、男手ひとつで娘を育てなければならない状況に陥るものの、信一はそれを苦とも思わないという描写がある。「朝起きるとすぐ子供の世話をして近所へあづけて会社へ通はなければならない。夕方はあづけさきから子供を受取つて帰る、この日課が一年近くも続いた」にもかかわらず、信一にとって、「去つた妻の事は少しも思ひ出さないのに、別れた子供の事だけは、夢のなかでも涙をこぼすくらゐに恋しくてならなかつた。…信一は、きやつきやつと一人で笑つてゐる赤ん坊のそばで少しばかり酒をのむのが無上の愉しみであつた」と思っている。そして、出征するために娘を里子に出すことにしたが、「戦場へ出てゐても、信一は子供の写真を見ると、嗚咽が出るほど哀しく切なかつた。女々しいほど子供に逢ひたくて仕方がなかつたのだ。…戦争最中には赤ん坊の事などは忘れてしまつてゐるはずなのに、さかんに赤ん坊の姿が激しく弾の飛んで来る空中に浮んでゐる。」

妻が夫と自分の産んだ子供を見捨てること、そして息子ではなく娘であっても父が大切に育てることは、当時において男と女の境遇が逆に置かれたように感じられる。

さらに、信一は子供がいるということを絹子に打ち明ける際に、絹子にその子供の存在を受け入れるように哀願する。

でも、僕も何だか弱い気持になつてゐて、君がほしくて仕方がなかつたンだらう…。君はこの気持をわらふだらうが、これが人間の心といふものさ…

その衝撃的な事実に関心が動揺した絹子の様子を見た信一は「急に熱い手で絹子の指をつかんで、人差し指だの、中指、薬指、小指と順々に絹子の爪を自分の歯で噛んでいった」というやや官能的な描写を通じて、信一の自分を卑下する姿とそこから現れた絹子への堅実な愛が明らかになる。つまり、小説にある言葉の通り、信一は「女々しいほど」妻と娘を愛している男であり、その人物を通して、女であろうが男であろうが、「人間の心というもの」が同様であるという思想は時代を超えたものであると言えよう。

## 三 ＜雄（男）々しい女＞の役割

第二節は異色なく家＞という構造の片方、つまり男・信一に焦点を置いた。ここでそのもう一方である女・絹子の方へ視線を移そう。タイトルの「幸福の彼方」にあるように、主人公の絹子による「幸福」への問いが小説を綴る。具体的に、彼女の「幸福」に対する認識は四つの段階を経ている。

まず、信一に子供がいるということを初めて知った際に、絹子は「十六の年から奉公をしてゐて、大家の奥ふかい処に勤めてゐたせゐか、絹子は自分が一足飛びに不幸な淵へ立つたやうな気がしないでもないのである」と言っている。つまり、信一という子供

のいる男と結婚した自分は「幸福の彼方」＝不幸に陥ると絹子は思っている。

しかし、奉公した家のお嬢さんからの手紙には「絹さんのやうな幸福なひとはないと思ふ」ということが書いてある。「美しいお嬢さんではあつたけれども、結婚した相手のひとは、仲々の道楽家で、お嬢さんもやつれてしまはれた」という情報を踏まえて見れば、昔から脇役に過ぎなかった絹子は幸福な生活を送っている一方、主役であつたお嬢さんは不幸な泥沼に陥っているという結婚前後の二人の生活が対照的である。そのような力関係の逆転は、「結婚」という行為によるものに他ならない。つまりこの手紙が、女としての運命、あるいは幸福か否かは結婚相手で決められると提示しており、絹子の心にも強く響いているのであろう。

そして、海辺で信一の言動に感動した絹子は信一と一緒にその子供に会いに行く途中、電車で見かけた奥さんが一人で三人の子供を支えていることを「見てゐて、ほほゑましくなる風景であつた」と思い、「自分達の将来も、あの人達のやうに幸福にうまくゆくかしらと考へる」と言っている。言い換えれば、絹子はここで初めて母になることと「幸福」と結びつけるようになる。

最後に、「眠つてゐた良人は…鼻をかんでからも、丁寧に鼻を拭いて、その鼻紙を眼をつぶつたまま自分の膝のところへ持つてゆくと、横あひから肥えた妻君が逞しい腕を子供の膝ごしににゆつと突き出してその鼻紙を取つて自分の袂へ入れてしまつた」という場面を見た絹子は、「自分の眼の前にある奥さんのやうに、雄々しく信一をかばつて、これからも末長く生活してゆかなければならないと思ふのであつた」と言っている。ここで、母親になることは幸福に等しいだけでなく、女としての価値と義務にも繋がることがかかる。

以上のように、絹子の「幸福」に対する態度の変化が浮き彫りになっている。つまり、母というアイデンティティへの拒否から母親になることを幸福とみなすようになる。そのパターンはまだ「良妻賢母」を唱える家制度の枠から出ていない。とは言うものの、小説の結末において、絹子は「幸福の彼方」により具体的な意味を与えている。それは「雄々しい」母になり、不器用な、または弱い夫を支えることである。

ここで「雄々しい」という形容詞に焦点を与えたい。「雄々しい」は「男々しい」とも書かれる。前節の「女々しい」男と合わせて見れば、この形容詞のジェンダー対置が非常に興味深い。それを掘り下げるには、小説の初出時（1940年12月）を見逃してはならない。1937年の盧溝橋事件を経て、日本による中国への全面侵入が始まった。ペン部隊における僅か二名の女性作家の一人として、林芙美子の戦時文学に含まれた政治的意図が想像に難くない。戦争最中において、夫が戦場にいった女性にとって、母親という力の持つイメージから、最前線に立たない自分の存在価値や役割を見出し、無力感・虚無感から解放されることが目的の一つであると思われる。さらに、伝統的な家長というイメージに反する、極めて優しい人および戦争の被害者という対照的な身分を集めた信一は実際、前線で他国の人々の命を無残に奪う日本軍人に属する。それは侵略行為への美化とともに、＜銃後＞の女性は＜前線＞の軍人を支持すべきであることも黙示していると思われる。

### おわりに

『幸福の彼方』という小説から異色なく家＞の形が現れている。それは明治時代で法的に定められた家制度から生まれた「良妻賢母」とは大いに異なる「女強男弱」という構造である。そこには家制度への反発とより平等なジェンダー意識が含まれ、当時の女性に生きがいを与えるというフェミニズム的な意味を持つ一方、侵略行為を美化し、女性を戦争支持に導くというナショナリズム的な危険性も内包していると考えられる。